図書紹介


第2章の冒頭に、マホガニーという名前は西アフリカのヨルバ語に由来するとする説が書かれていて少からず驚いた。つまり本来は、アフリカに分布する同じセダン科のKhaya属の樹木に用いられたという説であるが、疑義を表明する学者もあるらしい。Swietenia属は、S. macrophylla, S. humilis, S. mahagoniの3種から成るが、互いに交雑しやすく、天然分布が重なっている所では識別が難しいという。本書は14章で構成されている。1. 緒言, 2. 種の特性, 3. 植栽樹種としてのマホガニー, 4. 種子高廃, 5. 育苗技術, 6. 適地, 7. 植林, 8. 植栽地の管理, 9. 成長と収穫量, 10. 材質, 11. しんくいむしの防除, 12. 保護, 13. 更新体系, 14. 結論で、このあとに私信、文献のリストがあり、末尾の付録には、マホガニー林分の間伐様式、「胸高直径-樹冠直径」にもとづくマホガニー林分の蓄積、マホガニー林分の単一蓄積調査、マホガニー林分の連続的蓄積調査、マホガニー林分の収穫表、マホガニーの材積表の6項が収録されている。S. macrophyllaについては、Lamb (1966) 「Mahogany of Tropical America: Its Ecology and Management」という著作があるらしいが、すでに30年以上を経ており、また天然林の生態と管理に焦点がおかれていた。この後後研究に2つの局面があり、1つはCATIEにおける1970年代の研究で、人工林造成の最大のネックであるしんくいむしの防除である。一方ずっと最近には、天然林のマホガニー開発に関心が寄せられており、危機に瀕する樹種として、天然林における生態が見直されている。このような事情を背景に、各章の項目にみられるような総説が試みられた。

熱帯林業 No. 44 (1999)